

ペテロのしゅうとめの物語

マルコによる福音書1：29－34

2018/09/12 井田 泉

イエスの最初の弟子のひとり、またやがて十二弟子の筆頭とされるようになったペテロは、元はガリラヤ湖の漁師でした。ペテロは結婚して、カファルナウムにある妻の家に住むようになったようです。妻の母親と同居です。そのしゅうとめの話がマルコによる福音書第1章に出て来ます。

カファルナウムはガリラヤ湖北岸の町です。漁業が盛んであるとともに、交通の要路にも当たるので通商で繁栄していました。当時の人口は約5万人と言われます。

他の町と同様、このカファルナウムにも会堂（シナゴグ）がありました。土曜日の安息日には仕事を休み、皆で会堂に集まって礼拝をささげます。これが生活の中心でした。礼拝は、聖書の朗読とその説き明かし（解説）＝説教、祈りと歌です。聖書は昔から伝わるヘブライ語で朗読されましたが、アラム語で生活している人々はほとんど理解することはできません。そこで朗読された聖書



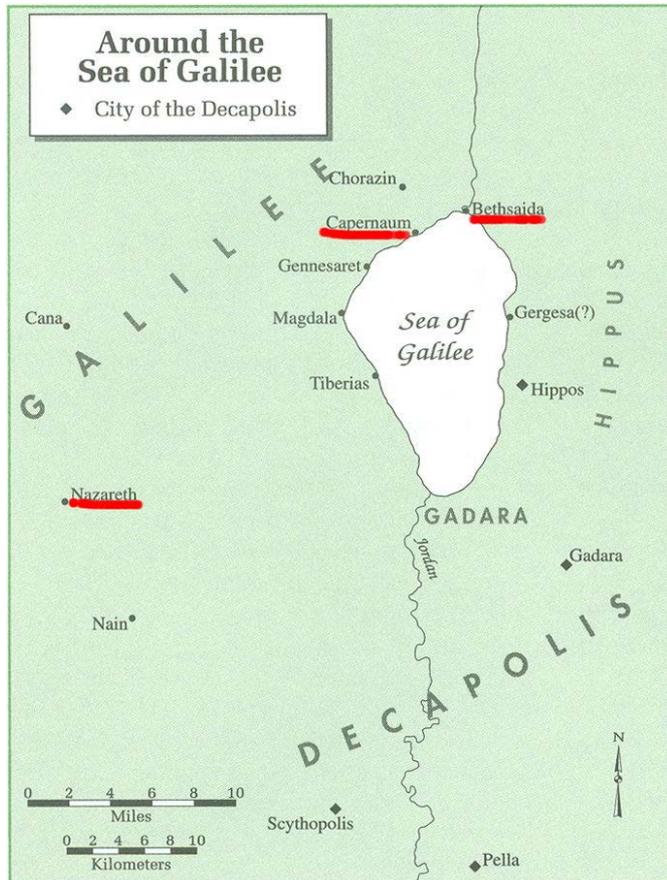
ガリラヤ湖畔

をその場でアラム語に口頭で訳していく役割の人がおり、そしてその内容を教える人がいました。教えるのは通常は律法学者と呼ばれる聖書の専門家です。神の掟、つまりわたしたちは神を信じるものとして何を守り何を重んじて生きていくべきか、というのが中心でした。

わたしはその日、これまでほとんど休んだことのない安息日の会堂礼拝を欠席しました。高熱が出て具合がひどく悪く、立ち上がることもできなかったのです。実はもうかなり前から体調は悪かったのです。理由はわかっていました。それは精神的なことから来ています。

それは娘の婿、ペテロのことです。ペテロはベトサイダに住む漁師でした（ヨハネ 1:44）。ベトサイダはカファルナウムの東の町で、歩いて1時間程度でしょうか。縁あって娘はペテロと結ばれ、ペテロはこちらに住むことになりました。ペテロはたくましい働き者。まっすぐな性格でした。熱血漢というのでしょうか、こうと思ったら突き進むようなところがあり、そこは少々心配でしたが、それがまた頼もしくも思えて、娘の将来を託せる人物だと信じた

のです。ペテロはよく働き、人の面倒見もよく、娘のことはもちろん、わたしのことも大事にしてくれました。神さまは娘にほんとうに良い人を与えてくださったと、わたしはどれほど感謝したかしれません。



ところが結婚してから何年くらいたった頃でしょうか。イエスという人物が現れて「神の国」が近づいていると訴え（マルコ 1:15）、神の愛を説き、真実と正義を行うように人々に呼びかけていました。何度かわたしも会堂礼拝でイエスの説教を聞いたことがあります。彼の話は他の律法学者たちとは違い、特別の引きつけるものがありました。神さまがここにおいて語っておられるかのように感じるのです。けれども律法学者やファリサイ派の人々がイエスのことを快く思わず、排除しようとしているのが見て取れました。しかし会堂長のひとりヤイロは、イエスを尊敬しているようで、たびたび礼拝で説教する機会を提供していました。

そこまではよかったのです。ところが、婿のペテロがすっかりイエスに心酔して、漁師の仕事も放り出してイエスについて回るようになってしまったのです。これは一時的な興奮でそのうち冷めるのではないかと思って、ずっと辛抱していたのですが、ペテロはますますイエスにのめり込んでいくようです。仕事も家のことも放り出した状態。わたしのことはいいのです。ただ娘のことはどうしてくれるのか。信頼していただけに余計にショックで、心配は募るばかり。一度思い切って、ペテロに直接「どういうつもりか。仕事もせずあんな人について回って、娘のことをどうしてくれるのか」と問いただしたことがありました。しかしペテロは「心配しないでください」と言うばかりで、まったく考え直そうという様子がありません。

こういうことが続くうちに、心配と憤りがわたしの中にたまりにたまってきてしまいました。今度の安息日の礼拝ではまたイエスが説教すると聞き、これでまたペテロの病気が（イエスに対する心酔と信奉は「病気」と言ってやりたい）高じるかと思うと、前日から具合が悪くなり、当日の土曜日の朝からは高い熱が出て動けなくなってしまいました。イエスのせ

いで婿がおかしくなってしまったと思うと、イエスに対する怒りも抑えることができません。心配と憤りをおなかにためて、全身は高熱でほてって、ただただ苦しくて頭の中で何かぐるぐると回るばかりでした。

それでも安息日は安息日、礼拝の日です。心の中で祈りを唱えながら、意識が薄れて寝てしまったり、また目が覚めて祈ったりしていました。

午後になってペテロが戻って来たようです。それだけではなく、大勢の人が来ている様子です。娘が部屋に入ってきて、「イエスさまが来られた」と告げました。

どうして？ いちばん会いたくない人がわざわざ家にやってくるとはどういうことでしょう。「具合が悪いからだれとも会いたくない……」と言おうとしましたが、声が出ません。そのうち足音が近づいて、ペテロが入ってきました。一緒にいるのが、例のその人です。わたしは目をつぶって無視しようと思いました。しかしその人は近づいて来てそばに座ったかと思うと、わたしの手を取ってわたしを起こしました。自然に体が動いたように思ったその瞬間、自分から熱が去っていくのを感じました。同時に、今まで自分を縛り付けていた重い何か、熱とともに去ってしまって、とても楽に、自由になった。自分の中に、これまで経験したことのない温かく清らかなものが満ちてきて、涙が溢れ、喜びと感謝が湧いてきました。イエスさまとの出会いはこのようでした。

わたしはすっかり元気になり、娘と一緒にイエスさまとその仲間の人たちをもてなしました。その時から、わたしはこの方のためにできることは何でもしたい、何でもしようと思意しました。生まれて初めて、自分がほんとうに生かされて生き始めているような感覚でした。

「この家を使ってください。いつでもどんなふうにもでも自由にお使ください。」

そのような言葉がわたしの口をついて出ました。イエスさまはそれをとても喜んでくださいました。

わたしはペテロのことにひどく不満を感じていたのに、今はペテロとまったく同じようにイエスさまの弟子となることを決めたのでした。

その日の夕方、日が沈むと、人々は病気の人や「悪霊に憑かれた」と言われる人たちをイエスさまのところに連れて来ました。家は人でいっぱいです。けれどもわたしは少しもそのことを嫌とは思いませんでした。わたしたちの目の前で、多くの人々がイエスによって癒されていきました。けれどもはっきりわかったのは、イエスさまが単に超能力を発揮しているというのではなく、病を抱えた人とイエスさまとの間に心の交流が起こっていて、その中で人が癒されていく、ということです。人々の嘆きと苦しみをイエスは受けとめられ、イエスから愛と憐れみがその人たちを浸していきました。ここに「神の国」があると感じました。

こうしてわが家は、イエスさまのカファルナウムでの働き、いやガリラヤ地方全体での働きの中心となり、拠点となったのです。

婿のペテロのことをわたしは見直しました。このイエスさまに惚れ込むのはやっぱりたいしたものだ、わたしの目に狂いはなかったと、何だか妙な満足も覚えたりしましたが、このような気持ちになるのはちょっと不信仰かもしれません。でもイエスさまはゆるしてくださいでしょう。

このあと、わが家にも、またとりわけ婿のペテロにもさまざまなことが起こるのですが、今はわたしの思い出はここまでにしましょう。

この場面は古今聖歌集 196 として歌い継がれてきました。

- ♪ 1 たそがれどきに イエスをかこみて
なげき乞いたる やまいの人ら
やがていやされ 喜びさりぬ
- 2 重荷をにない 悩むわれらも
この夕暮れに 目にこそ見えね
まします君の みもとにつどう
- 3 主よみそなわせ 憂いにしずみ
世をはかなめど なお世に仕え
君に帰らで 迷うものあり
- 4 この夕ぐれに いつも変わらぬ
み声を聞かせ み手をのばして
われらをいやし なぐさめたまえ